

[実践報告]

教科「音楽」におけるオンライン授業の成果と課題 ——対面授業時とオンライン授業時の比較検証から——

久保絃子

要 約

教科「音楽」のコロナ禍前の対面授業とコロナ禍で行われたオンライン授業を実践記録をもとに成果を比較検証した。オンライン授業でも対面授業時と変わらず十分に成果を上げられたことが分かった。オンラインレッスンを行った音楽教師たちもオンラインレッスンで対面レッスン同様の成果が上がると感じていた。またオンデマンド教材が活用されていた。大学授業アンケートでは「意欲」は変わらず「授業外学修時間」は増加していた。しかし一方でオンライン授業の問題点として「学生の孤独」があった。学生のアンケートでも学生は集団での学修を必要としていた。それらを踏まえて今後の授業について考察した。

キーワード：対面レッスン，オンラインレッスン，オンデマンド教材，集団学修

はじめに

2020年度は新型コロナウイルスの感染拡大により多くの教育機関ではオンライン授業を余儀なくされた。本学の「音楽（教）」「音楽（幼）」もオンライン授業となった。「音楽」は楽典の講義とソルフェージュ，ピアノ実技を行っている。これまで音楽オンラインレッスンはあまり積極的に行われていなかった。そのためこの科目ではピアノ実技のレッスンのオンライン化が懸案事項となった。ピアノ実技のオンラインレッスンの経験が教師側，受講者側ともに乏しく，当初オンラインレッスンでは成果は上がらないのではないのかという不安もあった。しかし実際に行うと当初思い描いていたこととは違うことも多く起きた。

本文では筆者が担当している「音楽（教）」「音楽（幼）」の成果を2019年度までの対面授業と2020年度以降のオンライン授業で比較し，オンライン授業の成果と課題について考察する。授業年度は資料を統一するために西暦で表記する。

1 教科「音楽」の授業内容

1. 研究対象授業について

「音楽（教）」「音楽（幼）」では音楽の基礎知識である楽典と読譜に必要なソルフェージュ、ピアノ実技を行っている。ピアノ実技では「子どもと歌うためのピアノ」を5曲弾けるようにするという目標がある。筆者の「音楽（教）」では小学校共通教材の中から5曲、「音楽（幼）」は『あさのうた（本多鉄磨作曲）』『おべんとう（一宮道子作曲）』『おかえりのうた（一宮道子作曲）』の3曲と教科書から任意の2曲の計5曲の習得を目指している。週1回100分の授業で楽典講義とソルフェージュ、個人のピアノレッスンをを行っている。

ピアノ実技では『誰でも弾けるピアノ伴奏』（梅沢一彦編kmp出版）を教科書に初心者は右手が旋律、左手が伴奏の簡単な2段譜の曲を、上級者はコードを参考にアレンジをしながら子どもと歌うためのピアノの習得を目指す。

受講生は平均して「音楽（教）」は10～20名程度、「音楽（幼）」は40名程度である。筆者が担当し今回の考察に使用する授業は以下の通りである（表1）。

表1 研究対象授業

2015年～2019年 コロナ禍前 対面授業

2015春期「音楽(教)」	14名	2015秋期「音楽(幼)」	31名
2016春期「音楽(教)」	35名	2016秋期「音楽(幼)」	41名
2017春期「音楽(教)」	24名	2017秋期「音楽(幼)」	44名
2018春期「音楽(教)」	20名	2018秋期「音楽(幼)」	41名
2019春期「音楽(教)」	7名	2019秋期「音楽(幼)」	42名

2020年 コロナ禍 オンライン授業

2020春期「音楽(教)」	22名	2020秋期「音楽(幼)」	42名
---------------	-----	---------------	-----

2021年 コロナ禍 オンライン併用授業(対面5回 オンライン10回)

2021春期「音楽(教)」	14名
---------------	-----

2. コロナ禍前 2015年春期～2019年秋期の授業実施方法

授業の冒頭30分は楽典やソルフェージュを行っていた。楽典では五線譜の読み方から音程、調性、コードを、ソルフェージュでは16分音符までの簡単なリズム打ちとリズム聴音を学修する。

授業後半のピアノレッスンはグループレッスン形式をとり、グループの前で演奏してアドバイスを得る。人数が多いためクラスを半分にし、グループレッスンと演習を交互に行っていた。グループレッスンは1人あたり3～5分の個人レッスン時間をとり、演習では1人1台の電子ピ

アノを使用して別室で自主練習を行っていた。

表2 コロナ禍前（～2019年度）の授業実施方法

	Aグループ	Bグループ
第2回	グループレッスン	演習（集団練習）
第3回	演習（集団練習）	グループレッスン
⋮	⋮	⋮

3. コロナ禍2020年春期～2021年春期の授業実施方法

2020年春期と秋期は完全オンラインで2021年春期は全15回中5回対面、10回オンラインで行った。楽典とソルフェージュの課題動画や課題の提出、学生との連絡にはBlackboardを使用し、オンラインレッスンは主にTeamsを使用した。（2020春期はZoomを使用。）オンデマンド課題は毎週、隔週で約30分のオンラインレッスンを受けるというかたちで行った。

表3 コロナ禍（2020年）の授業の実施方法

	Aグループ	Bグループ
第2回	グループレッスンとオンデマンド課題	オンデマンド課題のみ
第3回	オンデマンド課題のみ	グループレッスンとオンデマンド課題
⋮	⋮	⋮

楽典、リズム聴音のオンデマンド課題は授業開始時間にBlackboardで公開され、学生は動画を視聴してから楽典の演習問題、リズム聴音に取り組み、授業の振り返り（200～400字の自由記述）を記入して提出する。オンデマンド課題の提出締切は課題公開から約3日後とし、筆者は添削とコメントをして次の授業前までに返信した。

2020年のオンラインレッスンはクラスを半分に分け隔週になるようにした。2021年春期「音楽（教）」は人数が少なかったためグループは3つに分け毎週レッスンを行った。通信時間を考慮し5～10人の1グループとして約30分のレッスンを行った。オンラインのグループレッスン時は自分のレッスンの時以外も他の学生のレッスンを視聴するよう指示した。コロナ禍前の対面授業時は1人のレッスン時間は3～5分程度だったが、通信状況、コミュニケーションに時間がかかると考え1人8～10分とれるよう時間を調整した。学生には顔は出さなくていいでのカメラをオンにして手元を映すよう指示し、筆者は顔を映すカメラとピアノと手元を映すカメラの2台準備した。基本的には筆者は顔が画面に映るよう設定し、必要に応じて手元カメラ（図1）に切り替えた。

また2020年春期は第3回に、2020年秋期は第2回に初心者のみを集めて初心者講習を行った。（2021年春期は対面授業時に行った。）ロールピアノの貸し出しなど学生側のオンラインレッスン設備が完了するまでの対策で行ったが、指番号や手の形、一点ハ音の位置の確認など、経

験者がいると時間をかけて行えないところをじっくりと時間をかけて行うことができた。説明の後に、学生にはビデオをオンにして手元を映した状態で練習してもらった。筆者の方から複数の学生の手元が一斉に見えること、学生が質問をしてきた時にすぐに対応できることなどが対面授業時より良いところだと感じた。対面授業時にも初心者電子ピアノが複数ある部屋に集めてこのような講義をしていたが、学生1人1人の手元を確かめたり、弾いて見せたりするために教室を動き回る必要がある。オンラインレッスンだとお互いに鍵盤の前から離れることなく教員は複数の学生を見ることができ、学生も筆者の手元を見ながら練習ができた。



図1 オンラインレッスン時の筆者の手元カメラ

4. オンラインレッスンに向けての準備

第1回授業でピアノや電子ピアノの有無を調査した。両手で弾くことを前提としているため鍵盤ハーモニカや3オクターヴ未満の鍵盤楽器は不可とした。自宅にピアノや電子ピアノがない学生には大学からロールピアノを貸し出した。大学構内には入れないため、学生の自宅に郵送した。2020年春期は初めてのことであったがレッスン開始までに全員に鍵盤楽器を貸し出すことができた。2020年秋期、2021年春期も第1回授業に同様の調査をして自宅にピアノや電子ピアノがない学生にはロールピアノを貸し出した。コロナ禍前の対面授業時も自宅練習用にロールピアノを貸し出していたので、コロナ禍後は郵送をしたという違いである。

対面授業時は第1回授業で課題曲を筆者が演奏し一緒に歌唱していたが、オンラインではそれができないため、筆者の手元を映しながら演奏した動画を準備した。

2 対面授業時とオンライン授業時の比較

1. 合格曲数の比較

2015年春期～2021年春期の「音楽(教)」「音楽(幼)」を受講した377名のアンケートやレッスン記録をもとにピアノレッスンの成果を検証する。コロナ禍前の対面授業時299名とコロナ禍のオンライン授業時78名で著しい違いがあったか比較検証していく。総数が異なるのですべて割合で比較する。以下2015春期～2019秋期を「対面レッスン時」、2020春期～2021春期

を「オンラインレッスン時」とする。

1) 全体の比較

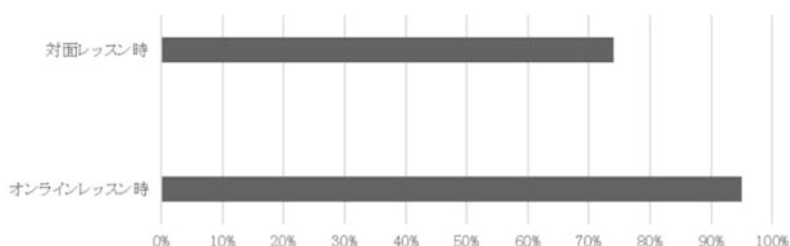


図2 5曲以上合格した学生の割合

学生は個人レッスンで5曲合格できるように練習をする。5曲合格した後は、自分の弾きたい曲を練習しレッスンで弾ければ合格となる。合格の基準は「止まらずに旋律と伴奏を両手で弾く」である。図2は合格者数を比較したものである。目標の5曲以上の合格者だけを比較すると対面レッスン時は74%、オンラインレッスン時が95%だった。オンラインレッスンでも95%の学生が5曲止まらずに両手で弾けるようになった。

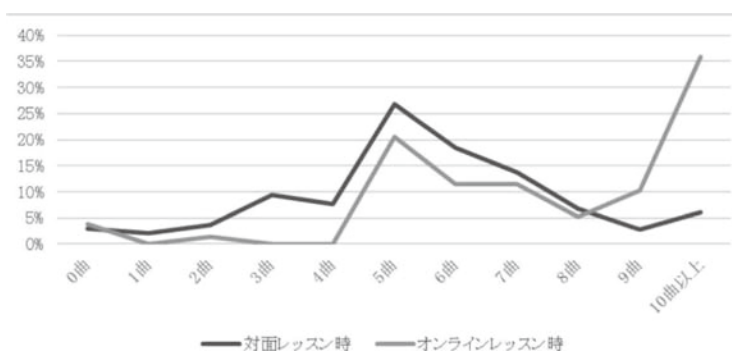


図3 合格曲数

図3は学生の合格した曲数である。5曲弾けてからの合格曲数の違いがある。1曲もレッスンで弾くことができなかった割合は対面レッスン時3%、オンラインレッスン時3.8%と差がないが、オンラインレッスン時は10曲以上の合格者が多く、1曲～4曲のみの合格者がほとんどいない。

2) 10年以上の鍵盤楽器経験者の比較

10年以上経験者の合格曲数に違いが見られた(図4)。対面レッスン時は7曲にピークがあるのに対し、オンラインレッスン時は10曲以上にピークがある。これにはいくつかの原因が考えられる。1点はオンラインレッスンでは音質やアーティキュレーション、強弱の指導に限界があり、音とリズムが正しく弾けていれば合格にせざるを得ない状況があった。対面レッスン時は5曲合格して余裕のある学生には音とリズムが正しくでもアーティキュレーションや強弱

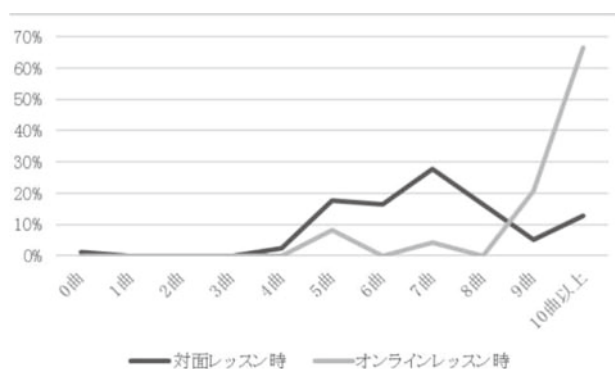


図4 鍵盤楽器10年以上経験者の合格曲数

の工夫に余地がある場合「もう1回弾いてきて」と合格を出さないこともあった。2点目は、対面レッスン時は教室のグランドピアノでレッスンを受けていたが、オンラインレッスン時は自宅で普段練習している楽器をそのまま演奏していた。いつもと違うグランドピアノで弾くとタッチの違いに戸惑う学生が多くいる。しかしオンラインレッスン時は練習通りに弾くことができた。3点目は学生の練習時間である。特に2020年度は大学授業がほぼオンラインだったため学生は通学時間などがなかった。他の授業課題もあったが経験者にとってピアノ練習は気分転換にもなり対面レッスン時より十分に練習時間が確保できていたと考えられる。実際にとても練習している様子が見えがえた。また数少ない教員と話せる授業だったようでピアノが得意な学生は会話も含め楽しんでいて、積極的に授業に参加している様子が見えがえた。特にピアノ経験者にその傾向が強く、合格曲数が多くなったと考えられる。

3) 未経験者の比較

オンラインレッスンに行くにあたり未経験者への指導は不安が大きかった。実際に横で弾いて見せることも、一緒に弾くこともできない中で指導ができるのか不安であった。図5は未経験

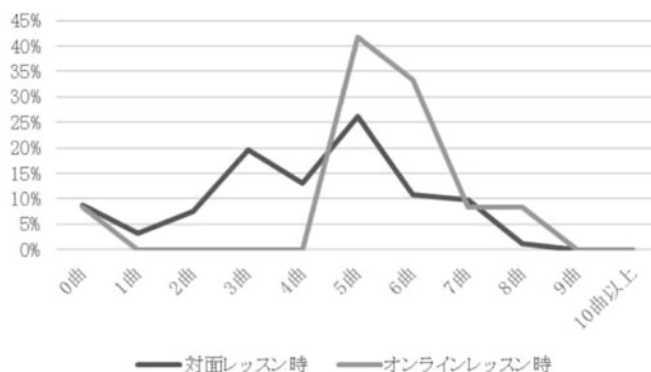


図5 鍵盤楽器未経験者の合格曲数

験者の合格曲数を割合で比較したものである。4曲未満はほぼ同じ割合で5曲以上も同じような稜線をたどっていて大きな違いはなかったといえる。未経験者は初回アンケートで鍵盤楽器を弾いたことがない、と回答した学生である。

図6は未経験者が1曲目を合格したレッスン回の比較である。対面レッスン時は第1回の全体講義で指番号の説明、ピアノの練習方法、課題曲の歌唱を行っていた。オンラインレッスン時は未経験者のみを1回目のレッスンを受ける前にオンライン上にリアルタイムで集め、指番号、ピアノの練習方法の説明、課題曲の模範演奏をして、実際に筆者の手元を見ながら自分の鍵盤を弾く練習をした。ロールピアノが届いていない学生も紙の鍵盤で指を動かした。

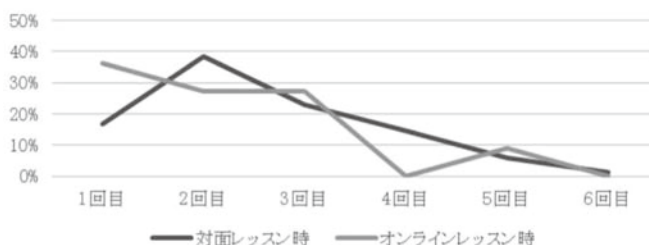


図6 未経験者が1曲目を合格したレッスン回

合格したレッスン回は、対面レッスン時にはレッスン2回目が多いがオンラインレッスン時は1回目のレッスンで合格が多く出ていて、3回目までにはほぼ全員が1曲目を合格させている。

1曲目が弾けるまでの時間がオンラインレッスン時の方がかからなかった要因として2点考えられる。1点は動画の活用である。手元を映した動画をうまく活用できたと考えられる。動画を見ながら練習したという学生が多くいた。またグループレッスン時に弾ける学生の手元を見ることができた。実際にオンラインのグループレッスン中、他の学生の手元を一生懸命見ていた学生がいたり、他の学生の指使いを参考にしたというコメントもあった。もう1点はプレッシャーがあったと考えられる。対面レッスン時は約20名を出席番号順にグループで分けていたが、オンラインレッスン時は通信時間が長くなりすぎないためにグループの人数を10名以下にして初心者が固まらないようにグループを分けた。結果、グループに初心者が1人か2人になってしまった。「自分だけが弾けていない」と感じてしまった学生もいた。また対面レッスン時は弾けても弾けなくても座席に戻ればクラスメイトがいて、一言二言言葉が交わせる。「弾けなかった」「練習してきたのに…」とクラスメイトと言葉を交わしているのはよく耳にしていた。よく言えば温かい、悪く言えば生ぬるい空気があった。しかしオンラインレッスン時は同じ時間帯につながってはいても学生は筆者としか通話ができない。弾けても弾けなくても時間が来たら通話の回線を切って一人きりになる時間ができてしまう。2020春期は1年生が12名いた。横のつながりがまったくなく、どのくらい弾ければいいのか情報もない。その緊張感は画面越しでも伝わってきた。筆者もいつも以上にかかる言葉を気遣ったがその孤独は相当なものであったと想像する。

2. 大学授業アンケートの比較

大学が行っている授業アンケートで対面授業時とオンライン授業時の「授業外学修の時間」と「意欲」を比較する。コロナ禍前の2016年春期～2019年秋期とコロナ禍の2020年春期～2021春期の本学が行っている「学生による授業アンケート」の結果を使用する。2020年春期に授業アンケートをweb上に移行した際に設問が変わっているので、同様の内容の設問を比較することにする。

2019年秋期までは最終授業時にアンケート配付回収を行っていたが、2020年度よりweb上でのアンケート回収となったため2020年度より回答率が下がっているものと考えられる。

表4 授業アンケート調査授業と回答率

対面授業時		オンライン授業時	
2016春期「音楽(教)」	100%	2020春期「音楽(教)」	77.30%
2016秋期「音楽(幼)」	100%	2020秋期「音楽(幼)」	71.40%
2017春期「音楽(教)」	100%	2021春期「音楽(教)」	50%
2017秋期「音楽(幼)」	100%		
2018春期「音楽(教)」	100%		
2018秋期「音楽(幼)」	100%		
2019春期「音楽(教)」	100%		
2019秋期「音楽(幼)」	95%		

1) 時間外学修の時間の比較

対面授業時の2016年春期～2019年秋期の「授業ごとの予習・復習にどれくらいの時間を充てたか」とオンライン授業時の2020年春期～2021春期の「授業1回に対し授業外学修（予習・復習・課題など）を何時間しましたか」を比較した。設問の変更に伴い選択回答も変わっているので以下の表5のようにまとめて割合を比較した。

表5 回答のグラフ表記

グラフ表記	対面授業時	オンライン授業時
3時間以上	3時間以上	4時間以上 3時間～4時間未満
3時間未満	3時間未満	2時間～3時間未満
2時間未満	2時間未満	1時間～2時間未満
1時間未満	1時間未満 ほとんどしていない	1時間未満

図7はアンケート結果である。明らかに授業外学修時間が増加しているのが分かる。対面授業時は2時間以上授業外学修をしていた学生が2割に満たないことが多かったのに対し、オン

ライン授業時には7割の学生が2時間以上の授業外学修をしていたと回答している。オンライン授業は授業の拘束時間が100分ではないので動画視聴（約20分）とオンラインレッスン（隔週で30分）以外を授業外として回答していた可能性もあり、また対面授業時は隔週60分別室で自主練習が授業時間内にあったので、一概に授業外学修時間が大幅に増えたとは言い切れないが、全体的に増えている。

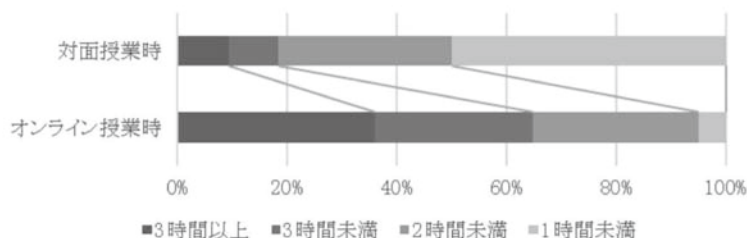


図7 授業外学修時間

2020年度の授業外学修時間の増加については複数の調査で明らかになっている。こども教育宝仙大学の音楽実技授業の授業評価アンケートでも遠隔授業の良かった点で「練習時間の確保が容易になった」ことがあげられている¹⁾。また園田学園女子大学の中野は2019年度に1年次に対面でピアノレッスンを受けた2020年度の2年生に「1年次の対面レッスン時の練習量と比較して練習量は変化したか」という調査を行っている。「とても増えたが17%，増えたが43%で、合わせて60%の学生が練習量が1年次と比較して増えたと回答している。また1年次と変わらないと回答した学生は28%，減ったと回答した学生は合わせて12%であった²⁾」本学は半期であるために同一学生に対面レッスン時とオンラインレッスン時の練習量の変化を調査できなかったが、このように同一学生で練習時間が増えたというデータもある。

本研究対象の学生たちも、全体的に授業外学修時間が増えていることからピアノの練習時間も増えた可能性が推察できる。

2) 意欲についての比較

対面授業時の2016年春期～2019年秋期の「授業についての総合評価。意欲的に取り組んだ。」とオンライン授業の2020春期～2021春期の「授業に意欲的に取り組みましたか」を比較した(図

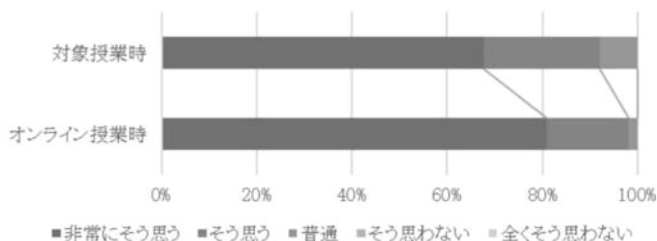


図8 意欲

8)。回答選択肢の変更はない。

意欲の項目に関しては対面授業，オンライン授業で大きな差は見られなかった。対面授業時のアンケート回答率は100%だったのに対しオンライン授業時はアンケート回答率が77%，71.4%，50%と回答率が低い（表4）。そのためオンライン授業時の方がより意欲的な学生がアンケートに回答していて「非常にそう思う」の割合が多いと考えられる。

3 オンラインレッスンをを行った教師へのアンケート

音楽実技の専門レッスンを行っている教師にアンケートを行った。2021年12月3日～12月10日にGoogleフォームで行い13名から回答を得た。回答した教師がレッスンしている対象生徒は，社会人（プロ，アマチュア），大学生（音楽学部，教育学部），高校生，中学生，小学生である。

コロナ禍前（2019年3月以前）にオンラインレッスンをしたことがあったのは1名（8%）であった。コロナ禍になるまでほとんどの音楽教師はレッスンを対面で行っていた。

コロナ禍にオンラインレッスンを行ったのは8名（62%）で，オンラインレッスンを行わなかったのは5名（38%）だった。オンラインレッスンを行わなかった理由は「大学の教職の実技科目が対面授業に切り替わったため」「工夫することで対面授業が実現可能だったため」など対面でのレッスンが可能になった場合と「環境が整わなかった」というオンラインレッスンの環境整備ができなかった場合，「ストレスフルで有意義でないと感じるので」と非対面レッスンは必要ないとした場合があった。また5名中3名は対象生徒が小学生であった。

オンラインレッスンを行った教師に「オンラインレッスンに不安はありましたか」と聞いたところ，8名中7名が「あった」と回答した。ほとんどの音楽教師はオンラインレッスンに不安を感じながらスタートしていた。

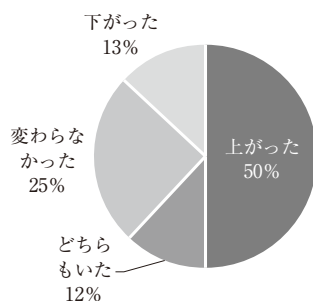


図9 生徒の意欲

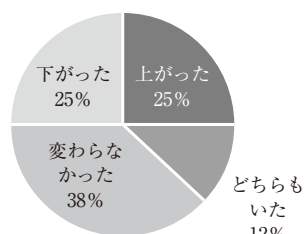


図10 上達のスピード

オンラインレッスンを行った教師に生徒の意欲とレッスンの上達について聞いた（図9，10）。意欲は「上がった」と「変わらなかった」が7名，「下がった」と答えたのは1名だった。また生徒の上達のスピードについては「上がった」と「変わらなかった」が6名，下がった2

名となった。3/4の教師が上達のスピードが「上がった」「変わらなかった」と回答していてオンラインレッスンでも成果を上げられていたことが分かる。

オンラインレッスンでよかったと感じたことを自由記述で聞いた。

- ・お互い必死な感じが伝わった。
- ・レッスンを録画して生徒が復習できるようになった。また宿題なども積極的に録画提出するようになった。
- ・どうやったら効果的な練習ができるが生徒自身が考え、工夫（努力）する姿勢が見られた。

生徒側が能動的になっている状況がうかがえる。2020年は誰もが初めて経験する特別な状況であったことが大きいですが、オンラインレッスンでは生徒が積極的に取り組んでいたことが分かる。

オンラインレッスンを行った教師の多くがオンラインレッスンの成果を実感していた。2020年が特別な状況であったことは否定できないが、教師側からみてもオンラインレッスンは成果を上げることができたといえる。

4 集団練習の必要性

文科省の調査「新型コロナウイルス感染症の影響による学生等の学生生活に関する調査」³⁾によればオンライン授業の悪かった点で1番多かったのが「友人などと一緒に授業を受けられず、寂しい」で半分以上の53.0%の学生が回答している。また同調査で「悩みを改善・解決するための相談先」として68.7%の学生が「友人」をあげている。学生生活の悩みで「学内の友人関係に関すること」に悩みがあると回答した学生は29.1%いて、そのうち29.9%が「友人を思うように作れないため」、48.2%が「友人と思うように交流できないため」と回答している。筆者もオンラインレッスン時に画面を通して学生の孤独を感じたこともあり、課題のコメントやメールで寂しさや焦燥感を打ち明けてくる学生もいた。リモートで音楽科演習を行った宮崎国際大学の日高も「友達と音や音楽で触れ合ったりやかかわりあったりすることが難しく、孤独や寂しさ、焦燥感を感じている学生も多く見られた」⁴⁾と述べている。

対面授業時には集団で練習する時間を設けていた。楽典講義後、自分のグループレッスンでない約1時間（隔週）を電子ピアノのある部屋で練習をする。ヘッドフォンをしているのでお互いの音は聴こえないが、練習時間を共有する。オンライン授業時はこの時間がなかった。今回、成果の差はあまりなかったが学生は「友人などと一緒に授業を受けられず、寂しい」と感じていた可能性がある。集団練習の必要性について考える。

2021年秋期「音楽（幼）」を受講している学生40名に2021年12月13日に記名式でアンケート調査を行った。記名式で行ったのはピアノの習熟度によって相違があるかを調べるため、このアンケートは成績と無関係であると説明したうえで行っている。2021秋期「音楽（幼）」は教室の問題で最初の4回分の授業がオンライン併用となった。

表6 2021秋期「音楽（幼）」授業スケジュール

		Aグループ	Bグループ
第1回	9月27日	授業ガイダンス	
第2回	10月4日	グループレッスン(対面)	オンデマンド課題
第3回	10月11日	オンデマンド課題	グループレッスン(対面)
第4回	10月18日	グループレッスン(対面)	オンデマンド課題
第5回	10月25日	オンデマンド課題	グループレッスン(対面)
第6回	11月1日	グループレッスン	演習(集団で練習)
第7回	11月8日	演習(集団で練習)	グループレッスン
⋮	⋮	⋮	⋮

学生は個人練習のみの1か月（第2回～第5回の期間）と隔週で集団練習がある2か月（第6回～）を経験した。そこで個人練習のみの時と集団練習があった時のどちらの方が練習が捗ったか調査した。全体では55%の学生が集団練習の方が捗ったと答えた。ただし、今回は集団練習に電子ピアノではなくロールピアノを使用しているので、「個人練習のみ」と回答した11名中6名が「集団練習はロールピアノであったから」と楽器の問題が理由であると回答していた。ピアノ経験5年未満の学生に限定すると65%が集団練習の方が捗ったと答えている（図11）。

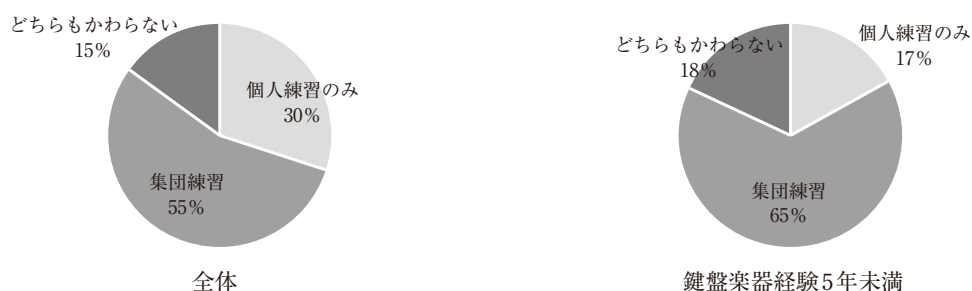


図11 個人練習のみの時と集団練習があった時、どちらの方が練習が捗りましたか

図12は集団練習でのクラスメイトについて聞いたものである。あてはまる選択肢すべてにチェックを入れてもらった。クラスメイトから良い影響を受けていることがうかがえる。「クラスメイトの練習が気になって集中できない」は4名（10%）と少ない。

「授業時間外に授業について友人に相談したことがあるのか」は「ある」が20名、「ない」が20名だった。「ある」と答えた学生にどのような状況で相談したかを聞いた（図13）。実際に会った時に相談していることが多い。なかでも19名は学内で会った時に相談している。「オンラインツールを使って相談する」という回答はなかった。

「集団練習が必要だと思いますか」は「あった方がいい」が24名（60%）、「どちらでもいい」が12名（30%）、「ない方がいい」が4名（10%）であった。「どちらでもいい」の12名中3名は「ロールピアノでなければあった方がいい」と回答している。ピアノ経験5年未満の学生に限ると「ない方がいい」は0名であった（図14）。

教科「音楽」におけるオンライン授業の成果と課題



図12 集団練習のクラスメイトについて



図13 どのような状況で相談したか

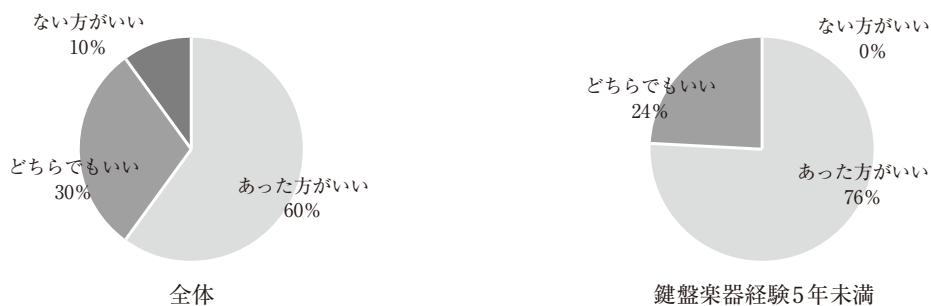


図14 集団練習が必要だと思いますか

理由を自由記述にしたところ「あった方がいい」の理由に以下のものが複数あった。()内は人数。

- ・教え合える (6)
- ・時間が確保される (5)
- ・練習している姿が励みになる (6)

図12の「集団練習のクラスメイトについて」でも「クラスメイトの練習が励みになる」と28名が答えていて、クラスメイトの存在は大きいことが分かる。また「教え合える」と記述した学生の中にピアノ技術が高く、合格曲数の多い学生が複数名いた。このような集団練習になるとできる学生ができない学生を教える時間が増え、できる学生の練習時間が不足するのではないかと心配していたが、技術が高い学生は教え合うことでさらなる向上を目指していることが分かった。

このようなアンケートからも学生が大学に登校し、同じ目標に向かって顔を合わせて学修に励むのは学業の向上に不可欠なことであると考えられる。個人のピアノ実技であっても集団で

学ぶ意義があることが分かった。

5 オンライン授業の利点と問題点

1. オンライン授業の利点

音楽のオンライン授業の利点として、教師アンケートにもあるように学生が能動的であった。実際に授業外学修時間は増え、経験者の合格曲数が大幅に伸びた。また授業後の振り返りも丁寧を書く学生が多くよく内省できていた。オンライン授業は学生がアクセスしないと教員側は何もできない、という不安があったが、そのような問題は対面授業時と変わらなかった。それより「ただ授業に参加する」という学生の割合が減り、準備を整えて授業に参加する学生が増えた。

オンデマンド教材も学生の学修に役立った。楽典知識とピアノ技術には相関性がある⁵⁾。そのことから「音楽」の授業では楽典の知識を身につけることも大切にしている。オンライン授業時は楽典とソルフェージュはオンデマンド教材で行った。毎回20分程度の楽典とソルフェージュの動画を配信し、動画の内容を確認する演習問題を解いて提出させた。同様にソルフェージュも動画内に入れ、動画を見ながらリズム打ちを行ってからリズム聴音をして提出させた。

対面授業時はト音記号が分からない学生から調性やコードの活用方法まで分かっている学生まで知識の差がある中で授業を行っている。動画配信にしたことで自分のレベル、スピードに合わせた学修ができたようであった。また、楽典動画を課題提出後も残しておいたので「復習に役立った」という声もあった。授業中は友達に聞いたりするのもはばかれるが、自室での動画視聴だったので友人と一緒に電話しながら動画の内容を確認したという声もあった。

ソルフェージュも授業前の個人差、経験差が非常にある。リズム打ちやリズム聴音が初めての学生も多い。対面授業時はリズム打ちを約40名で一斉に行うことになる。数名のできる学生がいると、分かっているにもかかわらずリズムに合わせて手を叩くことになる。1人で行うと自分の「できる」「できない」が明確に分かるのでできるまで繰り返し練習する学生が増



図15 両手のリズム打ち動画

えた。オンデマンド動画は繰り返し再生して練習できるという利点があった。また対面授業時は「間違ってしまうかも」と周囲が気になって集中できないが1人だと安心して集中してできた、という声もあった。また右手と左手で違うリズムを打つ両手のリズム打ちでは筆者の手を上から映した動画を作成した(図15)。対面授業時では教壇で行っているが、机の楽譜を見ながら教壇を見るのは難しい。動画だと楽譜と手本を同時に見ながら取り組むことができてやりやすかったという声もあった。

動画ではリズム打ちの後にリズム聴音の課題を行った。2～4小節のリズムが30秒間隔で3回演奏されるのを記譜する。聴音経験者は動画を止めずに、未経験や苦手だと感じる学生は動画を止めても何度聴いてもよいとした。聴きとり記譜した楽譜を提出し筆者が添削をした。リズム聴音に関しては動画での向上をあまり期待していなかったが、授業の振り返りに「聴く回数が減った」「聴きとれるようになってうれしい」「今回は止めないでやってみました」などのコメントがあり学生は前向きに取り組んでいた。実際に回数が進むごとに聴きとれるようになった学生もいて想定以上の成果があった。「回数が減った」「動画を止めなかった」など自分の成長を実感できるのが意欲の向上につながっていたと考えられる。また添削返却されたリズム聴音を見ながら動画を見て復習できることも聴音の向上につながったと考えられる。

2021年秋期は全面対面授業に戻ったが楽典の分野に関しては授業でも行いつつ、動画をBlackboardにあげている。課題に取り組むのに使用している学生も多く、楽典やソルフェージュの分野においてはオンライン教材の活用が今後も期待できる。東洋大学現代社会総合研究所ICT教育研究プロジェクトが行った「コロナ禍対応のオンライン講義に関する学生の意識調査」⁶⁾における教員アンケートでも40%の教師がオンデマンドで教育効果が高まったと回答していて、50%がアクティブラーニングにオンデマンドが適していると回答している。

2. オンライン授業の問題点

「両手で2段譜の曲を5曲弾けるようにする」という最低ラインをクリアすることはできたが、細かなアーティキュレーションや強弱、ペダル、音の指導まではできなかった。また通信状況によっては送信側(学生側)の機器が音量を調整してしまったり、速度が変わってしまったりして学生が弾いているものが同じように筆者に聴こえているとは思えないことが度々あった。より高度な技術や音楽性を求めるとなるとやはりオンラインレッスンには限界があると感じた。

また指導個所の指示が難しかった。楽譜に慣れていない学生とのやりとりで「何段目の何小節目からもう一度弾いて」と言ってもなかなかすんなりといかないこともあった。楽譜への注意の書き込みもできないので経験が浅い学生ほど難しかった。

また音楽のオンラインレッスンの大きな問題で「タイムラグ」がある。今回の「音楽」の授業でも特にリズムが苦手な学生とのレッスンで難しさを感じた。一緒に演奏することができないので、対面授業時に行う教師と一緒に弾く、という音楽レッスンの基本的な手法がとれない。

配信動画に合わせて練習するように、という指示以外でできなかったのでリズムに関しては十分に直すことができなかった。

授業外学修時間についても増加したことがいいとは言い切れない。4時間以上使っていた学生もいて周りが見えない分、追い込まれていた可能性も否定できない。文部科学省の調査⁷⁾でも「オンライン授業の悪かった点」で2番目に多かったのは「レポート等の課題の量が多かった」(49.7%)であった。授業外学修時間の増加は学生が学修時間をコントロールできていなかった可能性がある。特に初心者は顔の見えない他の受講者がどんどん弾けていくことに不安になっていた。対面授業なら授業前後の会話などで、その学生が経験者であることやピアノがもともと得意な人だなどを知ることができるが、オンラインレッスンではそういった情報を学生が得ることは難しい。横のつながりががないのは不安要素になり学修時間が必要以上に増加したとも考えられる。

6 オンライン授業の成果と今後

コロナ禍に入り行ったオンライン授業はコロナ禍以前の対面授業と比べて成果が落ちたとは言えなかった。シラバスに掲げる目標はオンライン授業でも十分に達成できた。特にピアノ実技においては多くの不安があったが学生側の努力もあり例年通りの成果が上がった。教員もオンラインレッスンの成果と可能性を実感していた。またオンデマンド教材が学生の学修の大きな手助けになることも分かった。楽典やソルフェージュに関しては対面授業においても活用できる。

いっぽうでオンラインレッスンではできなかったこと、負担になったこともあった。繊細な音楽的な指導はオンラインレッスンでは難しいことが多い。また学生がともに学ぶことの重要性も今回の調査で改めて確認することができた。

今後はオンライン授業で得た新しい知見をもとに対面授業でもオンデマンド教材を活用し学生の学修の向上につながるよう、授業展開やレッスン方法について研究、考察していきたい。

最後になるが、アンケート調査にご協力いただいた梅沢一彦先生、また実践、アンケートに協力し、このような考察の機会を与えてくれた学生たちに心から感謝するとともに、この未曾有の困難の中、レッスンに励んだ78名の学生に心から敬意を表する。

注

- 1) 大澤里紗「保育養成校のピアノ指導における遠隔授業の実践と課題」『こども教育宝仙大学紀要 12』2020年, p.74
- 2) 中野圭子「オンラインレッスンに関する一考察」『園田学園女子大学論文集 第55号』2021年,

p.141

- 3) 文部科学省「新型コロナウイルス感染症の影響による学生等の学生生活に関する調査（結果）」
2020年5月25日
- 4) 日高まり子「リモートによる音楽科演習の一考察」『宮崎国際大学教育学部紀要 教育科学論集
第7号』2020年, p.99
- 5) 久保絃子「教科「音楽」におけるアプローチについての考察」『玉川大学教育学部紀要 論叢第
17号』2017年, p.195
- 6) 東洋大学現代社会総合研究所「コロナ禍対応のオンライン講義に関する学生意識調査」2020年
10月14日
- 7) 文部科学省「新型コロナウイルス感染症の影響による学生等の学生生活に関する調査（結果）」
2020年5月25日

参考文献・引用文献

- 梅沢一彦編『誰でもすぐ弾けるピアノ伴奏』kmp, 2015年
- 大澤里紗「保育養成校のピアノ指導における遠隔授業の実践と課題」『こども教育宝仙大学紀要12』
2020年, pp.71-77
- 川内奈保子「ピアノ個人指導における対面レッスン, オンラインレッスンそれぞれの利点, これからの
活用について」『大和大学研究紀要 第7巻教育学部編』2021年, pp.37-54
- 久保絃子「教科「音楽」におけるアプローチについての考察」『玉川大学教育学部紀要 論叢第17号』
2017年, pp.187-200
- 東洋大学現代社会総合研究所「コロナ禍対応のオンライン講義に関する学生意識調査」2020年10月
14日
- 中野圭子「オンラインレッスンに関する一考察」『園田学園女子大学論文集 第55号』2021年,
pp.135-147
- 日高まり子「リモートによる音楽科演習の一考察」『宮崎国際大学教育学部紀要 教育科学論集 第
7号』2020年, pp.90-100
- 文部科学省「新型コロナウイルス感染症の影響による学生等の学生生活に関する調査（結果）」2020
年5月25日
- 山内信子「音楽教育におけるオンライン授業の可能性と課題」『聖和短期大学紀要 第7号』2021年,
pp.57-67

Achievements and Challenges of Online Lessons in the Subject “Music”: Comparison Verification between Face-to-face Lessons and Online Lessons

Hiroko KUBO

Abstract

I compared and verified face-to-face lessons before the Corona disaster and online lessons conducted at the Corona disaster based on practical records. It was proved that the online lessons were as successful as the face-to-face lessons. Music teachers who took online lessons also felt that online lessons would produce the same results as face-to-face lessons. On-demand teaching materials were useful. In the university class questionnaire, “motivation” did not change, and “out-of-class study time” increased. However, the problem with online classes was “student loneliness.” In the student questionnaire, the students needed group study. After taking these facts into account, I considered the future lesson approach.

Keywords: Face-to-face lessons, Online lessons, On-demand teaching materials, Group study